

1 年頭の所感

市長

皆様、新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願ひいたします。本日の案件である2026年、令和8年の年頭にあたり、今年1年の所感をお伝え申し上げたいと思います。まずは、昨年を振り返りますと、私は市政を進めるにあたり、「創」という一字を掲げて邁進してまいりました。これは、「横須賀から新たな価値を創造し、それを市民の皆様のかけがえのない財産としていくこと」を目指したものです。その中で、長年、構想を重ねてきた様々な取組みが、いよいよ具体的な形として動き出した、実りのある1年であったと感じています。中でも、大きな前進として、浦賀ドック周辺地の再開発と大矢部弾庫跡地の利活用、の二つをお伝えしたいと思います。浦賀は、ペリー来航の地であり、造船の街として日本の近代化を支えた、横須賀の歴史の象徴的な場所だと思っています。造船所としての役割を終えた後は、永く静かに眠りについていましたが、この度、住友重機械工業さんのご厚情により、「第二の開国」をテーマに、歴史と未来が交差する、横須賀ならではの特色を活かしながら、浦賀を産業・文化の拠点としてだけでなく、世界に開かれた街として整備を、進めていくこととなりました。令和11年には新たな街を、一部でも皆様にお見せできるように着実に歩みを進めてまいります。

また、大矢部弾庫跡地においては、令和10年の完成を目標に、防災機能と市民交流を兼ね備えた「大矢部みどりの公園」の整備を進めています。この場所は、三浦半島のルーツとも言える三浦一族に、非常にゆかりが深い場所であり、軍に接収をされていたがゆえに、都市化の波を避けられ、現在まで、その当時の姿を、奇跡的に残しています。今後は、三浦一族を永く顕彰する場所にすると共に、新しいコミュニティの拠点としてまいります。これらふたつのプロジェクトは、市長就任以来の悲願であり、実現に向けた確かな一歩を踏み出せたことを、大変嬉しく思います。これらの事業はいずれも、単なる施設整備にとどまるものではなく、横須賀のアイデンティティを、もう一度掘り起こし、次の時代へと、しっかりとつなげていく試みであります。民と官、そして地域の皆様と丁寧に議論を重ねながら、それぞれ役割を果たし、進めていくことで、横須賀ならではの魅力と価値をより一層高め、将来世代に誇れるものとして、形にしていきたいと思います。

街の姿も、着実に変わり始めています。横須賀の中心地である横須賀中央駅前では、若松町1丁目地区市街地再開発事業における建築工事がいよいよ今月から始まります。追浜駅や、京急久里浜駅周辺においても、バスタ事業など、様々な開発事業の計画検討が進められており、住居、商業、交流・賑わい機能が一体となった新たな都市空間が生まれようとしています。これらの各地域が、それぞれの特色を生かしながら、大きく動き始めていることを、是非感じていただきたいと思います。これまでの様々な取り組みの積み重ねにより、令和6年には、観光来訪者数が、ついに1千万人を超えました。転入者数も増加し、特にファミリー層では転入超過となるなど、人口動態にも、前向きな変化が生まれています。更に、来年には、小栗上野介を主人公としたNHKの大河ドラマ「逆賊の幕臣」の放映が予定されています。横須賀の歴史や風土、先人たちの足跡が全国に広く発信される、またとない機会であり、今後は関係機関とも連携しながら、街の活力や地域の誇りの醸成につなげていきたいと考えています。今年も引き続き、この流れをより確かなものとし、ひとりでも多くの方に、「横須賀に住んで良かった」と思っただけの街づくりを進めてまいります。

そして、行政の最終目的は、福祉の充実であります。横須賀で暮らす全ての方々が、多様性を認め合い、互いに支え合いながら、安全に、安心して生活できる社会、「誰も一人にさせない街」を実現することが、市政運営の根幹であります。にぎわいづくりや魅力創造による経済の好循環のもと、生み出した財源を市民福祉の向上に充てることで、全ての市民の方に、幸せを感じていただくことが、私の務めであると考えております。そのひとつとして、昨年は、医療・介護のビックデータを解析し、健康リスクを先読みした保健指導を、全国に先駆け導入しました。また、生成AI技術を

活用した、傾聴相談サービスにも着手したところです。引き続き最新のテクノロジーを最大限活用し、人にしかできない、人だからこそできる、市民ひとりひとりに寄り添う、健康・保健・福祉施策を展開してまいります。更に、昨年は、久里浜に横須賀市立総合医療センターを開院し、三浦半島における中核的な医療拠点として、新たな役割を担い始めるようになりました。こうした医療体制の充実をはじめ、福祉、子育て、地域支援など、暮らしを支える施策を更に重ね合わせることで、「誰も一人にさせない街」の実現に、引き続き全力で取り組んでまいります。

私が市長に就任してから、8年と半年余り。コロナもあり、世界は大きく変わりました。来年の、今頃、世界はどうなっているのか、誰も予想することはできないと思います。そこで私は、今年の字として「変転」を選びました。中国の台湾周辺地での軍事演習に加え、米国によるベネズエラへの行動など、この数日のうちに、世界においても様々に社会情勢が大きく変化しております。このような変化が自治体にとって、経済的にどのような影響があるのか、安全保障環境においても、どのような影響を与えるのか、全く予断を許さない状況であり、今年は去年以上に、社会は大きく変化すると思っています。横須賀市は、その変化に、決して遅れをとることなく、むしろ先駆者として、変化を力に変え、加速度を付け、前に進んでいこうという決意を、この「変転」という言葉と共に、年頭の所感として、お伝えしたいと思います。今年も、引き続き、よろしく願いいたします。以上です。

■質疑応答

記者

今年もよろしく願いいたします。2点あります。1点目は、先ほど今年の字は「変転」に決めたとお伺いしました。まず、上地市長の頭の中に他に候補があったのかということと、今、まさに来年度予算案の査定が一番のピークだと思います。来年度予算案の見通しと言いますか、どのような予算案に仕上げたいと考えていらっしゃるか教えてください。

市長

まず1点目は、「激動」を選ぼうと思いましたが、「激動」だとあまりに激しくなりすぎてしまうかなと思いました。「変転」も激しいかもしれません。昨年はエネルギーが胎動していて、様々なうねりがあったと思います。それが、是非はともかく、今年はおそらく顕在化すると思っていました。社会情勢も世界情勢も経済情勢もかなり大きく変化していきだろう、強烈にメリハリがついてくるだろうと予想していたのでこの言葉にしました。「激動」か「変転」だと考えていましたが、「激動」だとあまりに大嵐のようなイメージがあるので、良い意味でも変わっていきだろうと願いを込めて「変転」としました。

また、予算ですが、何度も言うように経済と福祉の両立を図る、循環を図ることがテーマです。音楽・スポーツ・エンターテインメント、これらはもちろんやらなくてはなりません。これをやりつつ、これをツールにしながら、観光で人を呼び寄せて、たくさんの人に横須賀の価値を上げてもらう。同時にその果実を福祉に転換していく。これは私がやらなければいけないことだと思っています。そしてもうひとつは、横須賀のアイデンティティです。戦前、戦中を通して、軍都であった横須賀にとって、横須賀のアイデンティティは何なのかといことを、もう一度考えたいという意味で、大矢部の三浦一族、それから浦賀の住友重機械工業跡地、これらは、横須賀の原点、横須賀の発展を表すものです。この2つを立ち上げて横須賀のプライド、横須賀の誇りを醸成していきたい。その願いを込めた予算になります。

記者

それでは、来月の予算発表を楽しみに待っています。

記者

今年、2026年ということで、2006年に横須賀で起きた米兵の殺人事件から20年の節目を迎えました。近年、横須賀で米兵の関わる事件・事故が起きております。この20年、また市長になられてからの8年と半年、米軍基地との関わり方などをどのようにお考えなのか、あらためてお伺いします。

市長

私は横須賀で生まれ育ちました。もっとひどかった時代から私はこの世界で生きています。それに比べれば、現在は日米両国で警ら、パトロールをしています。まさに画期的で昔では考えられないことです。最近、事故が多かったと思います。前向きに考えればお互いに話し合いながら進めていくという意味で、コロナのときには、同じ感染症との戦いだとの思いから、友情のようなものが芽生え、米軍基地、アメリカ人、軍人ということから離れて、人として付き合いが始まりました。しっかりとものを申せる関係になってきたと思います。この20年で、アメリカ人、日本人ということではなく、人として、隣人、市民として良き理解者になってきたと感じています。事件、事故が起きてきたことに関しては遺憾に感じます。この問題も含めて何ができるか、お互い、率直に、胸襟を開く関係を続けていきたいと思っています。

記者

もう1点、谷戸地域の件です。去年、田浦月見台住宅が開いて、アーティスト村（HIRAKU）も5、6年目になりました。ようやく地盤が築かれてきたのかなと感じます。そのあたり今後どのようにお考えかお伺いします。

市長

生活をする上で、都市化、利便性というところではなく、私自身谷戸で育ち、向こう三軒両隣という世界で生きてきて、このようなところに住処を求める人たち、価値を求める人たちは当然いらっしやうと思っていました。それも横須賀の魅力だと思っています。そのきっかけとしてアーティスト村、田浦月見台住宅を作りました。様々な人たちが谷戸に入って、仕掛けづくりをしていただいています。私は議員時代から谷戸に光を当てたいと思っており、それが前に進み、理解されるようになりました。都市に住む人たちにも脚光を浴びるようになってきたことは、新しい時代、自分が求めていた時代になってきたのではないかと思います。これからも引き続き谷戸問題には取り組んでいきたいと思っています。

記者

浦賀地区の再開発についてですが、去年の12月あたりに、開発企業と市が何かしらの協定やセレモニー的なことを行うかと思っていました。開発企業がこちらに来て、報道機関に何か披露する場はあるのでしょうか。

横須賀市 経営企画部長

浦賀の再開発につきましては、年度内には、住友重機械工業さん、今回の提案企業さん、横須賀市で3者協定を結ぶ流れで進めています。年度内には公表できると思います。

記者

大矢部についてですが、先ほど市長の説明の中で、横須賀のアイデンティティ、プライドとの話がありました。戦中戦後の軍事関係の街、軍港ということもあると思いますが、市長なりのアイデンティティ、プライドとは、どういうものか教えてください。

市長

横須賀の歴史を考える上で、主に三浦半島が登場するのは三浦一族の時代からで、三浦一族が出发点だと思っています。その前の時代の遺跡も、西地域を中心に出てきてはいますが、大きく歴史に登場するのはやはり三浦一族からだと思っています。歴史の中で、豪族のひとつとして存在したのが三浦一族であり、そこが三浦半島の出发点であると思っています。大矢部みどりの公園の土地は、一族の拠点たる円通寺さんがあった場所です。軍によって接収され、そのまま三浦一族の遺跡が残っていました。長い間、軍転法でこの土地を返していただけるよう様々なことを行ってきて、そしてやっと返ってくることになりました。三浦半島の原点は、大矢部みどりの公園の地だと考えています。祖先信仰ではないですが、祖先がそこに眠っていることに対して、手を合わせない街が、果たして発展するのとも思います。横須賀は軍で都市が発展したとしか表に出ていない中で、三浦半島の礎を築いて歴史に登場した人たちが眠る場所に対して手を合わせる場所が存在しないことを遺憾に思っていました。やっと返還いただいたので、是非、横須賀、三浦半島全体のアイデンティ

ティの出発点はここであると、顕彰して、心をひとつにする場所にしたいという思いです。

記者

これまで軍都として知られてきた横須賀ですが、軍転法を活かして平和都市を宣伝した。そこで聖地になるのではないかということでしょうか。

市長

そうです。三浦一族は自分の身を挺して一族を守り、逃がした歴史があります。絆というか三浦半島の家族愛にも結び付けていきたいと思っています。

記者

先ほどの説明でも触れていましたが、ベネズエラ関連の安全保障に関して、安全保障は国の専権事項だとは理解していますが、在日米軍の中核基地を抱える自治体の市長として、米国の今回の行動について何か思うところがあればお願いします。

市長

自治体の長としては、是非について言及するのはいかなものかと思っています。まずは立場上お許しいただきたい。ただ、世界情勢は変わっていく、力と力の激突になっていくのだろうというときに、米海軍第七艦隊の基地がある横須賀はどうなっていくのかは考えておかなければならないし、経済の安全保障でもどうなっていくかは案じています。また、私は全国基地協議会の会長でもあります。是非はともかく、変化に追いついていくように、変化を受け入れながら経済にしても市民生活にしても安定させるためにはどうしたら良いかを考えていかなければならないと思っています。

記者

去年の米国予算の一部凍結で本市もかなり経済的な波及があったのでしょうか。

市長

それはないです。そういうことではないです。米海軍第七艦隊の存在や基地の問題と今回の問題は違います。いずれ様々なことが起きるだろうと考えられます。自衛隊基地も横須賀にあります。影響という意味ではなく、変化を真正面にとらえてしっかりと市民生活を守っていかなければならないと感じています。

記者

適切に対処したいという意味でしょうか。事象が起きたことに対して遅れることなく適切に対処したいという思いでしょうか。

市長

もちろんそうです。それから、とにかくチャレンジャーでありたい。AIで網羅された社会で、人間の経験、知恵こそがAIを凌いで新しい社会をつくっていくと思っていますので、横須賀市はチャレンジャーでありたいと思っています。どんな変化にも負けずに対処するのではなく、向かってチャレンジしていく、そのような意味での「変転」と理解していただければと思います。

記者

年末の「よこすかカウントダウン」ですが、聞いたところ、2万7千人ぐらいの来場があったとのことでした。かなり混雑していて飲食などもあって、動線でかなり危ないと感じるところがありました。一昨年、去年と人が増えてきました。新年始まったばかりですが、来年以降、対策はどのようにお考えでしょうか。

市長

対策を考えないといけないと思っています。6割が市外の人たちでした。そこまで市外の人々が来ると思っておらず、今後もあのような状況であれば、動線を考えなければならぬと感じています。

記者

外国人の人が多いと感じましたがいかがですか。

市長

今年はすごかったです。やっと横須賀らしいカウントダウンができたのではないのでしょうか。なぜ来場者がこんなに増えたのかと思いました。やってよかったと思っています。アメリカ人だけではなく、たくさんの外国人の方がいました。あれこそ私が求めていたカウントダウンで、すごく良かったです。